月刊FALCOM MAGAZINE

Vol.147



届いたレーヴェの一撃
ワイスマンとの対決、ついに決着

英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～

ファルコム学園VS.ガルシス学園が勃発!?

も～っと集まれ！ ファルコム学園

シャーリィがイケメンな新衣装を披露！

『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

英雄伝説 碧の軌跡 いつか貴方とお茶会を

ドギほか今作の新キャラクターが続々登場! さらに冒険をより楽しめる新システムも!

『イースX -NORDICS-』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

アドルの相棒ほか新キャラクターが続々と登場！



さらに冒険がより楽しくなる新システムの情報も到着！

イースX -ノーディクス-

- ◆発売日：2023年予定
- ◆ジャンル：アクションRPG
- ◆対応機種：Nintendo Switch、PlayStation5、PlayStation4
- ◆プレイ人数：1人
- ◆CEROレーティング：審査予定

『イース』シリーズ生誕35周年記念作にして、ナンバリング最新作となる『イースX』。前号ではアドルともうひとりのプレイアブルキャラクター・カージャが登場。そして今回も、シリーズでお馴染みのアドルの相棒・ドギをはじめ、新キャラクターの情報が続々と到着！　そして、今作で新たに導入されるシステム情報も明らかとなった。

ドギ（CV：三宅健太）

年齢：23歳

アドルがエステリアで出会った、気風の良い巨漢の盗賊。
格闘による肉弾戦が得意で、自慢の剛拳は岩壁を砕くほどの威力を誇る。
古代王国イースを巡る大冒険を終えた後、ドギは盗賊稼業から足を洗うことを決意。
アドルとは妙に気が合うらしく、いつも新しい冒険に目を輝かせる彼のことを気にかけながら行動を共にしている。

アドル、お前さんといると冒険が向こうからやって来てくれるみたいだな。

















グレン・ベルジュ

（CV：小林裕介）　年齢：18歳

カルナックの街の自警団に参加している少年。常に前向き・熱血な性分のためか一人で空回ってしまうこともあるが、何気なく放つ言葉が物事の本質を突くことも多く同年代の少年少女から一目置かれている存在。
カルナック町長であるベルジュ氏の長男でもあるのだが、本人はそのことに触れられるのをひどく嫌っているらしい。

ロザリンド・ラズヴェリ

（CV：青山吉能）　年齢：16歳

街で評判の《宿酒場ラズヴェリ》の看板娘。ローザという愛称で慕われており、旅をしている同年代のアドルのことを気にかけて声をかけてくる。
周囲に気遣いができる上に気立てもよく、店の常連客からは「両親よりしっかりしている」と言われるほど。
ややロうるさい一面があるせいか、グレンやクルスといった同世代の少年たちとは気の置けない関係にある。

















まあ、仕方ないや。
幼い頃の憧れに過ぎなかったってことさ。

クルス・カーペント

（CV：広瀬裕也）　年齢：16歳

カルナックで繁盛しているカーペント商会の跡取り息子。
グレンやロザリンドとは同じ街で育った幼馴染の間柄だが、家の仕事が忙しく最近は疎遠になりつつあった。
読書好きで勉強することに苦手意識が無いためか、あらゆる知識が豊富。
一見大人しそうに見える少年だが意外と行動力があり、幼い頃にロムン帝国の商船で密航しようとして事件になったことも。

探索や冒険がより楽しめる！

新システム「マナアクション」とは？

本作で採用された「マナアクション」とは、古導具《アンティーク》と呼ばれる特殊なアイテムを入手することで発動することができるようになる新システムだ。また、マナアクションは、オベリア湾の各地にある「石版」を発見することで強化することができる。本作は帆船でオベリア湾を自由に移動できることも醍醐味のひとつなので、冒険のし甲斐がさらにアップすること間違いなし！



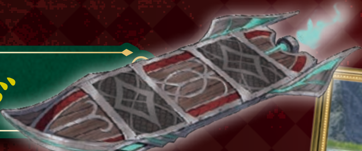
マナストリング





《ノルニルの糸車》からマナの紐を伸ばし、振り子運動の動きを利用して遠く離れた地点まで移動するマナアクション。
更に、マナアクションの強化により紐の強度がアップ。対象物を引っ張り出して足場にしたり、ダンジョン内のスイッチを切り替えるといった操作が可能となる。

マナライド





《グリンブルボード》に乗り、地面から浮き上がって滑走するマナアクション。
通常では移動できない水上移動が可能になるほか、「風の道」に乗ることで空中での高速レール移動が可能に。
また、「風溜まり」と呼ばれるスポットに入ることでカタパルトのように中空へ射出され、ジャンプアクションでは突破困難なエリアでも軽々と飛び越えることが可能となる。
更に、マナアクションの強化による《グリンブルボード》の性能がアップ。水流の激しい坂道でも、推進力を得て逆走することができるようになる。



マナバースト



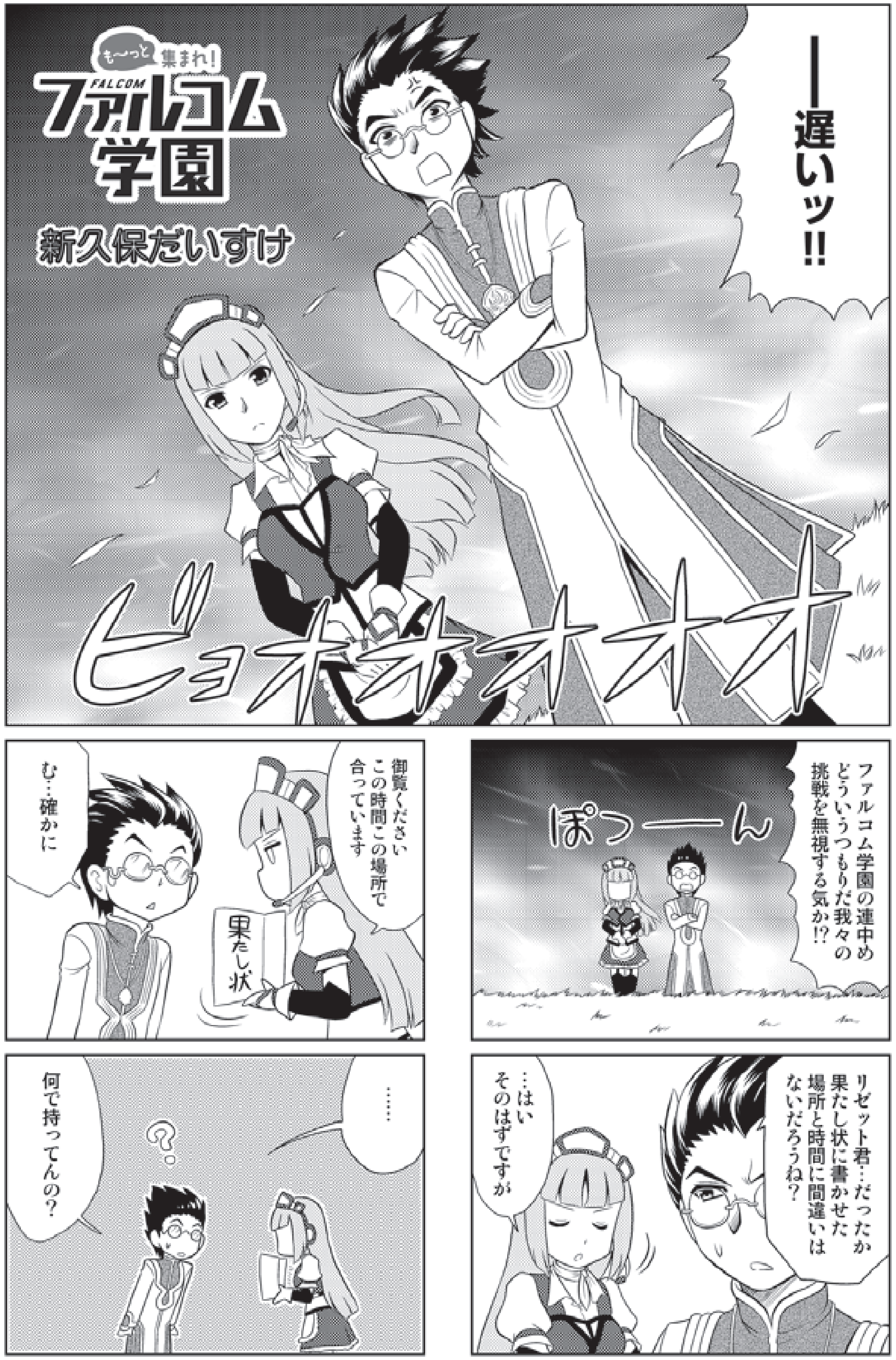
アドル／カージャのチャージ攻撃によって放出されるマナの属性攻撃。アドルは「炎」、カージャは「氷」の属性攻撃を行い、範囲内の敵にダメージを与えることができる。攻撃手段だけではなく、「炎」でダンジョン内の蔦を燃やしたり、「氷」で足場を生み出すなど、探索ルート開拓のためのアクションとしても利用可能。



マナ　KEY WORD

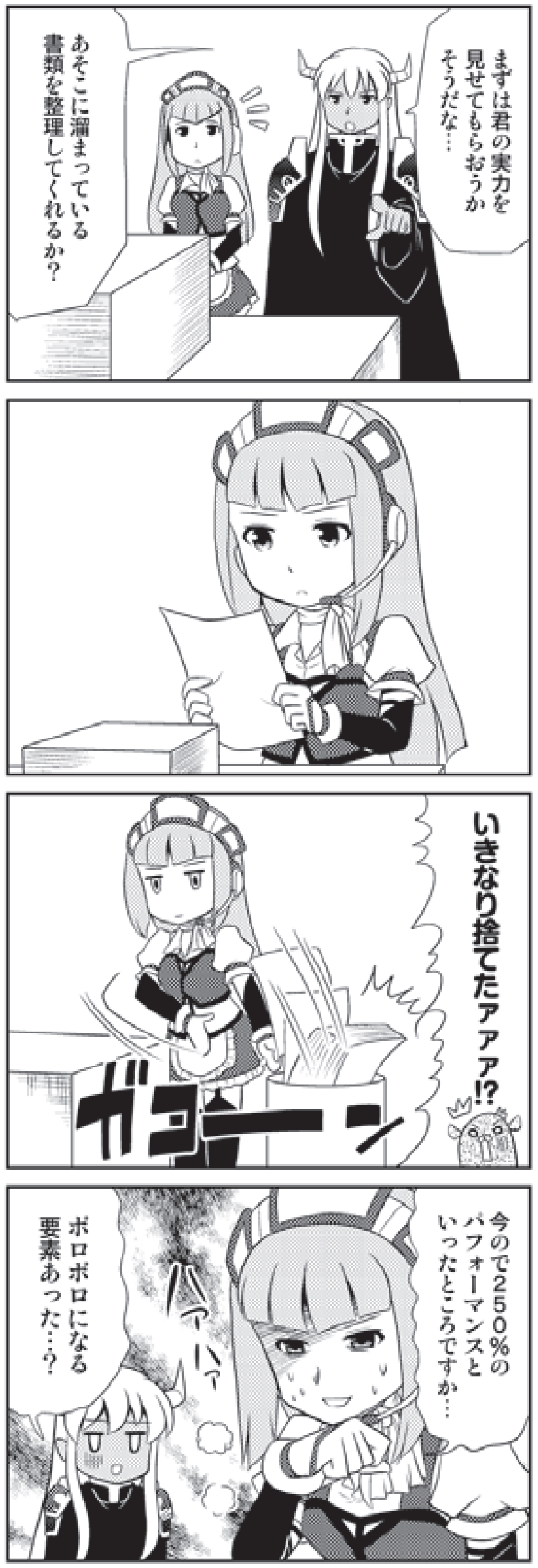
不死者（グリーガー）を退けられるという不思議な力。
元々は北海やボルト海の海洋民族に伝わる神聖な力の概念を「マナ」と称していたがはるか昔、選ばれし戦士がマナを応用した闘法を身に着けたことがノーマンの間にも伝わっている。
彼らにとってマナは剣に宿れば勝利をもたらし、船に宿れば航海の安全をもたらす“無形の力”とされている。

★決闘って何をするつもりなんだろ？★





本気のリセット



いつものアレ



リセットの不安



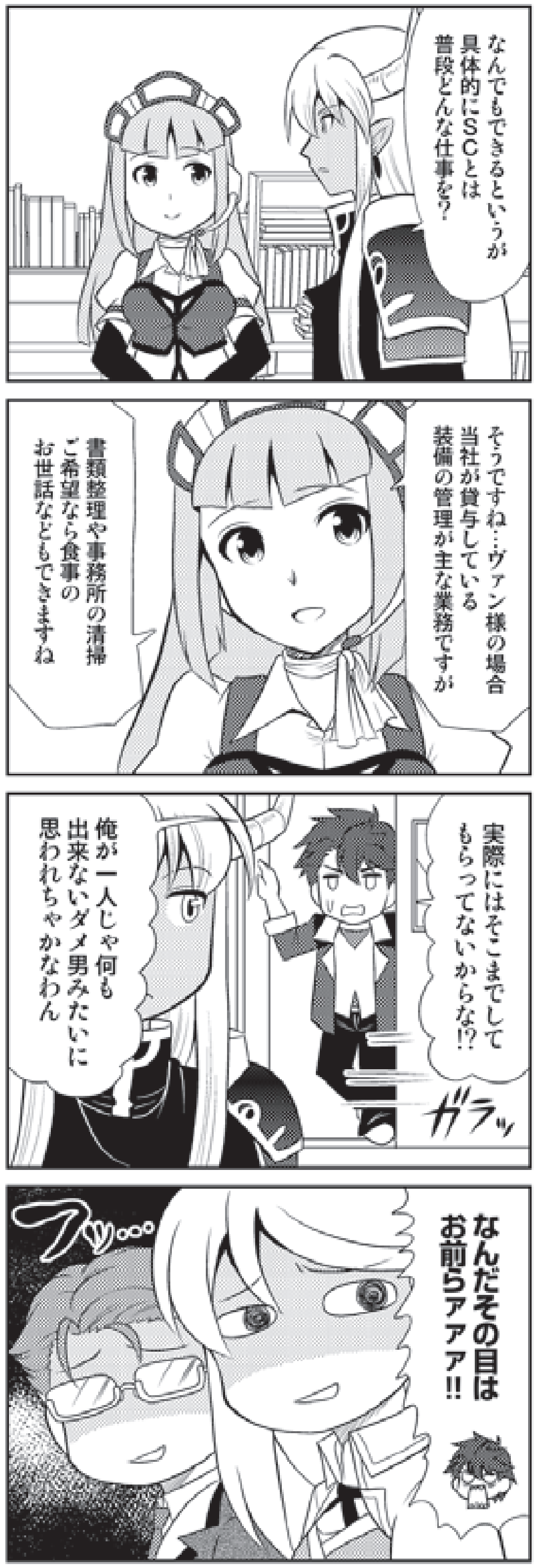
腐った果実



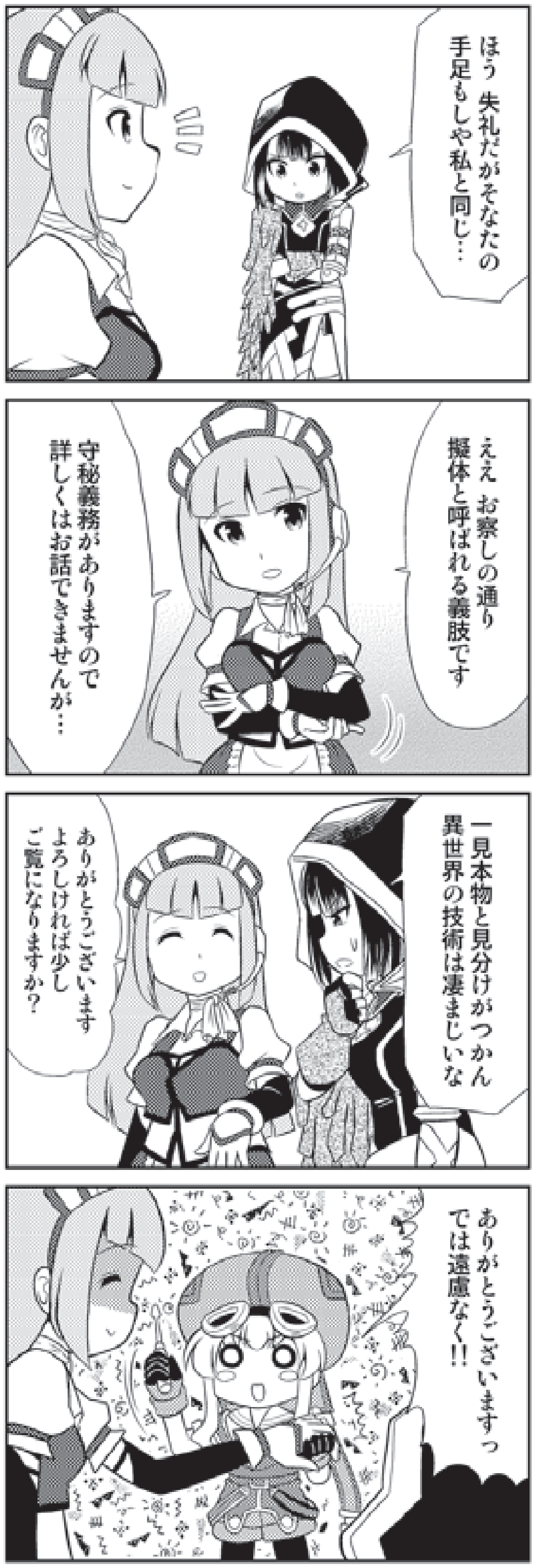
メイドじゃない



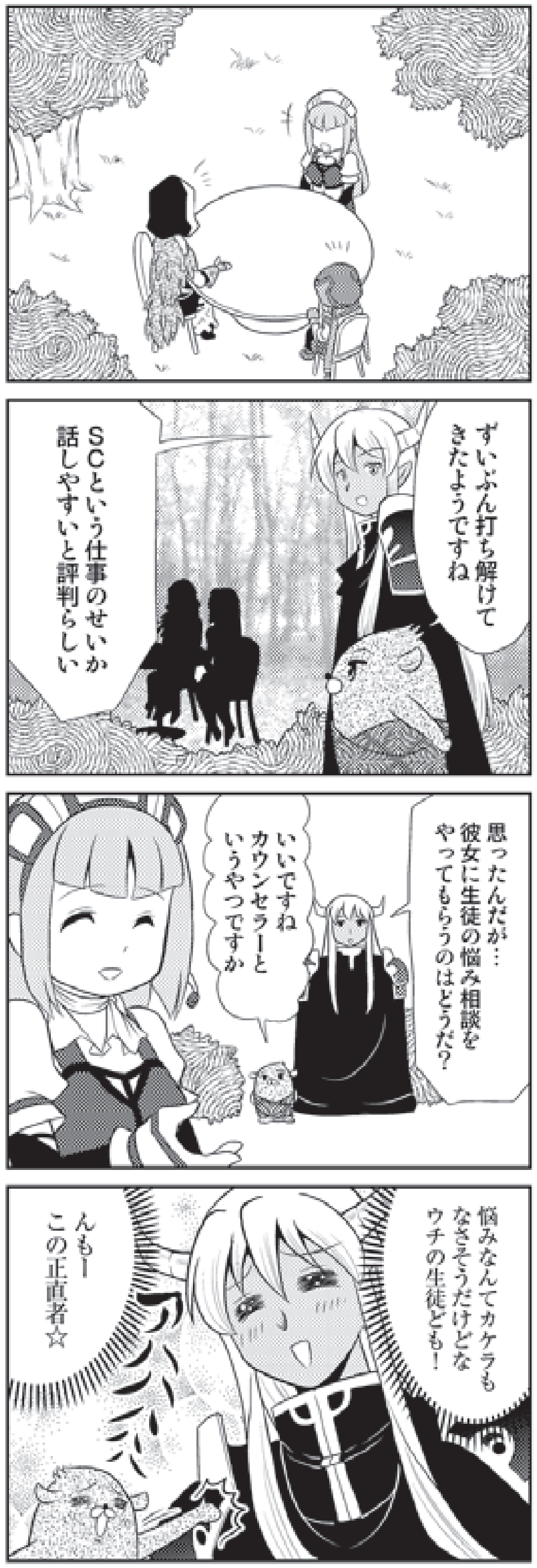
リセットの業務内容



擬体



話しやすいひと



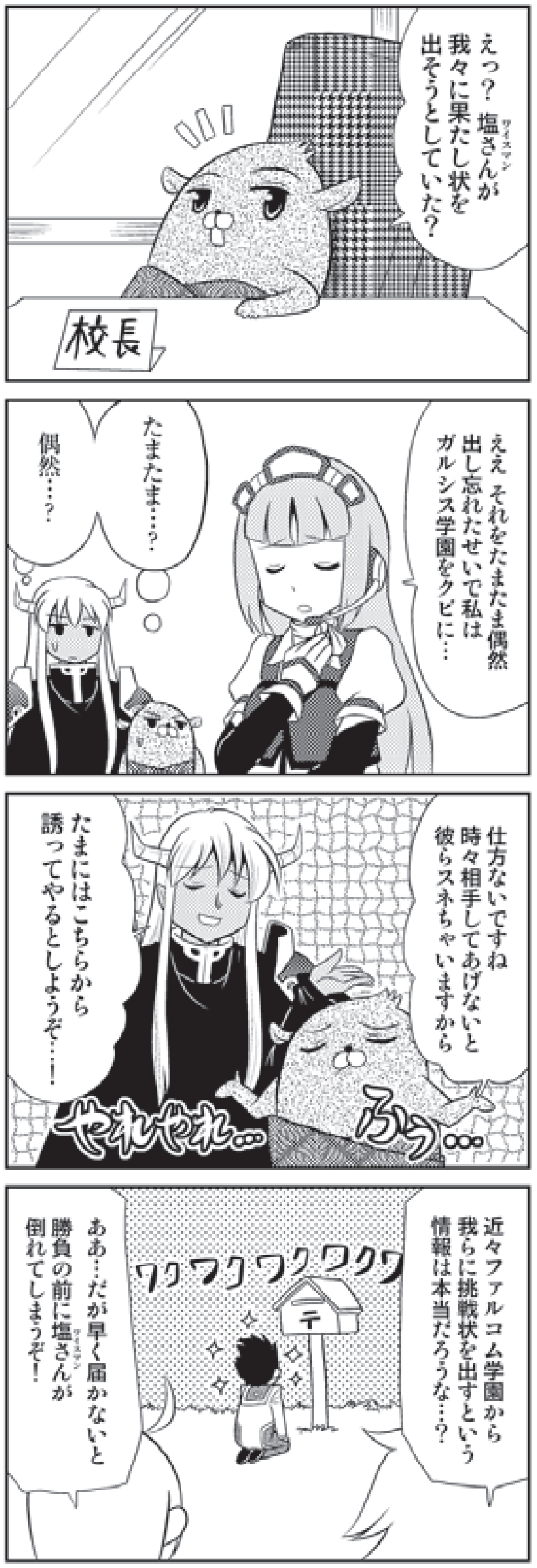
初めてのカウンセリング



コンシェルジュパワー



再戦申し込み



リセットのリベンジ




英雄伝説 創の軌跡
THE MISERABLE SINNERS 01
漫画：墨天業
《仮面の隠者》《暗殺者》《自律人形》
それぞれの思惑を胸に
運命と真実に迫る物語
定価：1000円（本体909円+税）
ISBN978-4-8021-3309-8
発行：フィールドワイ 発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©BOKUTENGOU ©Field-Y


穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースⅨ」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！
おまたせ！
待望の第2巻だよ！
も～っと集まれ!
ファルコム学園②
新久保だいすけ
定価：本体 900 円＋税
ISBN 978-4-8021-3213-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©DAISUKE ARAKUBO ©2020 FIELD-Y


空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
消えた…
や…
やったの…？
そんな…
《輝く環》が…
これで…
世界の危機が…
去った…？
消えてしまっただと…？


…馬鹿な…
…そんな…
馬鹿なぁぁぁ!!


ああ…
逃げやがった…
な…なんだかずいぶん慌てて撤退したわね…
《輝く環》の力を失って為す術がなくなったのか…
それはつまり正真正銘《輝く環》が消えたという証明だよ
リベールからすべての憂いが消え去ったのだね！


フウウン
ゴゴゴ
え？
何？
ゴ
この揺れって…
確かこの浮遊都市は《輝く環》の力で空に浮上していると聞きましたよね…
その《輝く環》が消えてなくなったら…
げっ
この浮遊都市も…
消え去ってしまう…


だったら
帰ろう！
あたしたちの
リベールへ！
あたしたちを
待ってくれてる
人たちのところに
みんなで
帰りましょう！


レーヴェ…！
しっかりして！
レーヴェ！
…ここは
じきに
落ちる
早く行け…
イヤだよ！
レーヴェも
一緒に…！


おまえなら…
わかるはずだ…
俺はもう
助からない
…嫌だ!
そんなの
嫌だよ!
レーヴェまで
姉さんみたいに…
なら
ヨシュア
おまえは
俺たちのように
なるな


これが…
納得できないのなら
俺や…
カリンのように
守るために
死ぬのではなく
守るために
生きろ
エステル・
ブライト
頼む
俺たちの弟を
支えて
やってくれ
約束する



次回に続く

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

333名に当たる『イース・メモワール -フェルガナの誓い-』発売記念WEB抽選会の開催が決定！

Nintendo Switch用ソフト「イース・メモワール -フェルガナの誓い-」の発売を記念して、ゲームアンケートフォームより応募できるWEB抽選会を開催。正解者の中から抽選で333名様に特製A4クリアファイル（非売品）がプレゼントされます。







【問題】

ゲームの序盤、《ティグレー採石場》へ町の人を助けに行くことになったアドルですが、その前に《バレスタイン城》へ寄り道してみると城の前にいる門番の「アンドレ」と会話をすることができます。

画像の空欄に入るアンドレのセリフをお答えください。

■**応募期間**：2023年4月27日（木）10:00～5月21日（日）23:59
■**応募方法**：期間中に、ゲームアンケート「イース・メモワール -フェルガナの誓い-」にご回答ください。
「フェルガナ」アンケート内に、WEB抽選会用の専用設問が加わっています。
「フェルガナ」のアンケートを送信後、「ご回答ありがとうございました。」の画面が表示されれば、WEB抽選会の応募が完了します。
■**注意事項**：
・ご応募はおひとりさま1回まで。重複した応募は無効といたします。
・プレゼント当選者には、5月24日（水）頃までに直接メールをお送りします。
・当選メールが受信できるよう「@falcom.co.jp」からのメールの受信設定をお願いいたします。
・景品交換は承れませんのであらかじめご了承ください。
・ゲームアンケートの通常のマンスリープレゼントは、WEB抽選会当選者さま以外からの抽選とさせていただきます。
■**抽選会ページ**：https://www.falcom.co.jp/ysf/special/campaign.html

「軌跡シリーズ」フィギュア化企画第6弾『フィー・クラウゼル』予約受付中！







コトブキヤと日本ファルコムが贈る『軌跡シリーズ』フィギュア化計画第6弾「フィー・クラウゼル」1／8スケールフィギュア予約を2023年5月23日（火）まで受付中。
愛用の双銃剣を両手に構え、得意のスピードを生かした戦闘スタイルをイメージした疾走感のあるポージングは、長く伸ばした髪やマフラーの動きと合わせて躍動感のある仕上がりとなっています。

■**仕様／素材**：PVC（非フタル酸）・ABS
■**発売月**：2023年10月
■**価格**：19,250円（税込）
■**コトブキヤふぃぎゅあブログ**：https://www.kotobukiya.co.jp/figure-blog/figure-blog-307160/

MODEROID「《蒼の騎神》オルディーネ」予約受付開始！「《灰の騎神》ヴァリマール」再販も決定!!

「英雄伝説 閃の軌跡」シリーズより、七体の騎神の一角《蒼の騎神》「オルディーネ」が、グッドスマイルカンパニーよりMODEROIDシリーズでプラキット化。2023年1月に発売された「《灰の騎神》ヴァリマール」も再販売が決定しました。この機会をぜひお見逃しなく！



■**メーカー受注期間**：2023年4月18日（火）～7月5日（水）21:00
※受注期間以降は予定数に達し次第受付終了となります。
■**仕様**：組立式プラスチックモデル・ノンスケール
■**発売時期**：2023年12月
■**価格**：7,500円（税込）
■**商品ページ**：https://www.goodsmile.info/ja/product/14255/

クロウ・アームブラストを中心に描く、オリジナルWEB4コマの連載スタート！

「英雄伝説 閃の軌跡」シリーズ生誕10周年を記念して、クロウ・アームブラストを中心に描かれるオリジナルWEB4コマ『クロウの《奔走（とっことこれーるず）》！』の連載がスタート。原作ストーリーの裏側で動いていたクロウのちょっぴりゆるっとした日々をお楽しみください。



■**作**：木々ゆうき
■**原作・監修**：日本ファルコム
■**企画**：電撃オンライン
■**まとめページ**：https://dengekionline.com/feature/crow_trails/index.html

4月の新／衣装替えキャラクターをチェック！

THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
４月はおなじみナハトの奮闘記を開催！
そして、シャーリィが意外な一面を見せてくれる新衣装で登場！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj



プリンス・シャーリィ

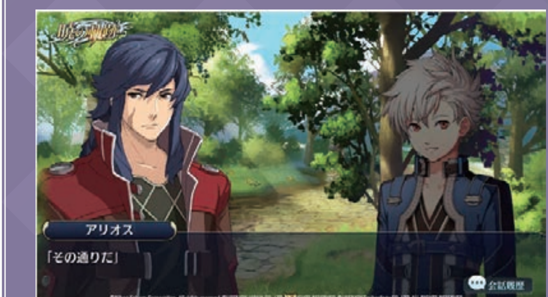
シャーリィがイケメンな王子様姿に。「美女と野獣」をコンセプトにした今回のヨーロピアンな新衣装。シャーリィはさながら「美女で野獣」といったところか。

期間限定イベント「ナハトの奮闘記 Vol.23 アリオス編」が実装！

ウルスラ医科大学病院を訪れたナハトは外で探し物をしているシズクを見つける。
「ご、ごめんなさい。ブローチを探してたんです」
そのブローチの持ち主は——シズクの父 アリオス・マクレイン。
大切な物を一生懸命に探す少女とナハトの小さな友情のエピソード。









※このイベントは終了しています。

『暁の軌跡』極秘資料館

「花嫁・クローゼ」衣装デザインラフ
（2022年５月実装）



「プリンス・シャーリィ」衣装デザインラフ
（2023年４月実装）



※画像は開発中のものです。※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

シュリは不安になった。
「服を買うんだろ？　中央広場の百貨店（タイムズ）とかじゃないのか？」
「クロスベルで女性へ衣服や装飾品をプレゼントするなら、ミシュラムか、この辺りだと聞いたんだ」
「そ、そうしょくひんだ……と？」
連れて来られたのは、高級ホテルにある高級ブティックだった。どのくらい高級かというと高級すぎてシュリにはよくわからない。
光っているかのように艶のあるドレスや、見たこともない宝石が売っている。
「ん？　このイヤリング……前にイリアさんが付けてたのに似てるな……ファンからの贈り物って言ってたけど……」
値札に視線を落とす。

英雄伝説 碧の軌跡 ～いつか貴方とお茶会を～

第4回

特務支援課のゆる～い(?)日常第２弾！

意外なキャラクターたちも続々登場！



©YUKIYA MURASAKI , KUBOCHA

エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、『碧の軌跡』シリーズ。その主人公を務めるロイド・バニングスら特務支援課メンバーと、彼らとともに壁を乗り越え続けた仲間たちの「あったかもしれない」ゆる～い日常の日々を描いた外伝小説の第２巻！「あのキャラとあのキャラが!?」と思わずにはいられない意外な組み合わせも続々登場の一冊をご堪能あれ！

製品情報
好評発売中
著　　：むらさきゆきや
イラスト：窪茶
定　価：1,210円（税込）

　ゼロがいっぱい付いていた。
「うげっ⁉」
「それが気に入ったのかい？　よかったら、ボクが」
「ば、ばか言うな。家が買えるぞ⁉」
「さすがに、それは無理だと思うけど……しかし、君には、もっと明るい雰囲気のほうが似合いそうだね。よし、これがいいかな。ああ、帽子も悪くない」
「おいおい……なに買う気だ？」
「いいから任せておきたまえ。これでも女性のエスコートには慣れているんだ。みんな笑顔になってくれる」
「それ、苦笑いだぞ、きっと」
「ふむ……ドレスは、これがいいか」
「オレになにを着せる気だ⁉　か、帰る！」
「なんだって⁉　それは本気かい？　やっぱり、ボクの情熱を伝えるには歌しかないってことだね」
「ぐっ……」
　これを放置して逃げるなんて、とても店に迷惑になるだろう。
　そんなことはできない。

　まだシュリの顔は、街の人たちに広まっていないが、アルカンシェル劇団の一員として自覚を持って行動するように、と団長から常々言われている。
「あ、あまり派手なのは嫌だからなっ」
「わかっているとも！　ボクは謙虚さを心得たジェントルメ～ンだからねっ」
　胸に手を当てたオリビエが、雪のように白くて金銀があしらわれた端々に宝石の光るコートをひるがえした。
　説得力がない。
　そして、シュリの予想は半ば当たってしまう。
　着せられた服は、上等なドレスだった。
　白くてひらひらしたワンピースで、肩にもフリルがついている。腰を布でしばり、後ろで大きなリボンにしていた。
　水色のアームカバーと、同色のハイヒールは、銀の刺繍と紅玉で飾られている。
　シュリは背中に、じっとりと汗をかいてしまった。
　アルカンシェル劇場を訪れる貴婦人たちが、こうしたドレスを着てくるのは見ている。
　しかし、自分がこんなものを着ることになるとは想像すらしたことがなかった。
「な、なんだよ、この服……ひらひらしてて……踊るのか？　靴も細すぎるし……なんでカカトが高いんだ？」

「歩きにくいかい？」
「べつに。バランスのトレーニングにもならねえけど」
「ほぅ……」
　すこし歩いただけで、オリビエが感嘆をこぼした。
　離れて見ていた店員たちも、うっとりと見とれている。
　シュリはドレスの裾をつまんだ。
　さわり心地が違う。
「なぁ、オレには、こんなの似合わないだろ？」
「まさか。とても似合っているよ。このドレスが君より相応しい者などいるはずがない。女神（エイドス）とボクの真心に誓って」
「アンタの真心はどうにも信用できないけど……それにしたって、高いんじゃないのか？」
「もちろん、高級品だとも。そして、もう支払ってしまったから、君が着てくれないと困ったことになる」
「もう買ったのかよ⁉」
「袖を通すなら、支払いを済ませておかないとね」
「こ、高級品って……そうなのか。試着とかないのかよ」
　店員が困惑したような顔をしている。

　これ以上もめていると、店に迷惑をかけてしまいそうだ。
　シュリは観念した。
　店に入ったのが、そもそもの敗因だったか。
「はぁ～……もう買っちゃったなら貰っておくけど……ただ、リュートを届けたくらいでコレじゃ、不釣り合いだろ。オレにできることはあるか？　あ、4時から練習があるから、それまでだけど」
　店の時計を見ると、残り2時間といったところだった。
　オリビエが嬉しそうに。
「それでは、ぜひとも街を案内してくれたまえ。ボクも明日には忙しくなる身でね。今日のうちに、クロスベルを存分に堪能しておきたいんだ」
「ああ、わかった」
「そうそう……これも」
　シュリは頭に、大きなリボンの結ばれた白い帽子がかぶせられる。
　姿見に映った自分に、思わず顔を赤らめた。
「だ、だれだ、コイツ……ぜったいオレじゃねえ」
「うん、とても綺麗だ」
「黙れって」

「さぁ、行こうか」
　店員たちの声を背に受けながら、シュリはオリビエと一緒に街へと出た。

「すこし遅くなったが、お昼を食べようじゃないか」
「オレ、そんなすごい店とか知らねえぞ」
「君がいつも食べているものがいい」
「いつも？　それなら、美味しいラーメン屋台が……待てよ……この格好だとヤバイな。飛ぶもんな、汁が」
「ボクは気にしないけど」
「無理だ。ハンバーガー……ピザ……あっ、西通りのほうに美味いパン屋があったな。ランチもやってるはずだから、そこにしようぜ」
　シュリたちは西通りで昼食を取った。
　オリビエは喜んでくれたが、シュリのほうは周りからの視線が気になってしまい、あまり味がわからなかった。
　落ち着かない。



その後、中央広場に出て大道芸を眺める。
ひょうきんなピエロのお手玉に、オリビエが飛び入り参加して真似をしはじめた。
五つの玉を右手で上げて、左手で受けて、まるで輪のように回していく。
最初は調子よかったが、手元が狂ったらしく、放り上げた玉が全部、彼の頭のうえに落ちてきた。
ぷっ、とシュリはふきだす。
「あははは……なにやってんだよ」
「フフ……いや～、意外と難しいものだね。見てるぶんには簡単そうなのに」
「そりゃそうだ。ぷはは……ぜんぶ、頭に当たるとか……ぷはは、むしろ、そのほうが難しいんじゃないか？」
オリビエが穏やかに微笑む。
「やっと、笑ってくれたね」
「え？」
「うん。ボクが思ったとおり、君は笑顔がよく似合う」
「な、なに言ってんだよ！　ばかじゃねえのか⁉」
シュリの顔が熱くなってくる。
オリビエが颯爽とリュートを構えた。
「この感動を歌にして、広場にいる全ての人に届けよう！」
「や・め・ろ！」
逃げるようにシュリは歩きだす。
ラララ～、と歌いかけた彼が、あわててついてきた。
「どうしたんだい？　演奏はこれからだよ？　あっ、場所を変えるのかな。ふたりきりの演奏会がいいなんて、ふふ……欲張りさんめ」
「黙れ。蹴飛ばすぞ」
睨みつける。
ハイヒールを穿いても頭ひとつぶん以上の差があるので、ぐっと見上げる感じになった。
オリビエはニコニコと笑顔だ。
「……アンタ、本当に楽しそうだな」
「もちろんだとも。ミュラーに管理される生活も愛が感じられて幸せだが、クロスベルは珍しいものが多い。なにより、君といると飽きないからね」
「なんだそれ……意味わかんねえ」
「君は楽しくないのかい？」
「どうかな。昔に比べたら……今は最高に幸せだよ。食べる物にも、寝る場所にも困ってないし、病気になったときに看病してくれる人もいる。打ち込める目標もある。だから……なくしたく

ないと思うから……がんばってるんだけど」
「それは〝楽しむ〟というのとは違うね。〝大切にする〟というのは、また別のことだ」
「……そうだな。イリ……えっと……いろいろと教えてくれてる人からも〝楽しむことが一番〟って言われてるんだけどさ。アンタみたいには、できないよ」
「ボクは天才演奏家だからねっ」
「はっきり言って、アンタ、そんなに上手くないじゃん。それなのに、どうして、そんなに楽しそうなんだ？」
　オリビエが固まってしまう。
　やがて格好つけて笑いはじめた。
「………フッ……天才とは理解されない宿命を背負っているのだな……フフフ……悲運の天才演奏家。いいぞ、それはそれでいい感じだ」
「な、なんか、すごく嬉しそうだけど、褒めてないからな？　にやにやすんなよ、気持ち悪い」
「フフ……この罵倒。そして、後世に高く評価され、理解されなかった悲運に人々は涙するのか。素晴らしいぢゃないか！」
　オリビエが一回転して、ウィンクをかました。
　キラキラと輝く。
　がっくり、とシュリは肩を落とした。

「ごめん……謝るから、その変に嬉しそうな顔はやめてくれ」
「もっと蔑んでくれたまえ。さあ！」
「いや、もういい。本当……オレも……アンタみたいな性格だったらな」
「今度は憧れの的かい？」
「ちょっと違うけどさ。プレッシャーとか感じたことないだろ？」
「プレッシャーか。そうだな……帝国、共和国、リベール、レミフェリアの代表が一堂に集まり、軍事経済について会談するのは、さすがに笑ってもいられないかな」
「な、なんの話だ？」
「フッ……ものの例えだよ」
「ふぅん？」
「高い視点で大局を見れば、たいていのことは些事にすぎない。このボクたちの人生さえも、巨大な星から見れば、ささいなことじゃないか」
「オレは星じゃねえから、よくわかんないけど」
「そうだな。ボクも星じゃなかった。それでは……」
「まぁ、なんとなく言いたいとこはわかったよ。たぶんな」
　シュリのぶっきらぼうな言葉に、オリビエが目を細めて、うなずいた。
「君の役に立てたなら、嬉しいよ」

「あ、うん……ありがとう」
「ん？」
「なんでもねえよ！」
シュリは自分でもよくわからない理由で顔を隠すように、白い帽子のつばを引いた。うつむく。
「もう、時間がなくなるぞ。他のとこを見ようぜ」
「どこへ行こうか？」
「……そうだな……東にするか」　東通りで、シュリたちは屋台などを見て回った。
それほど珍しくないだろうと思ったが、オリビエにとっては新鮮だったらしい。
そろそろ劇場に戻ろうかという頃――
肩がぶつかった、と言いがかりをつけられた。
オリビエがシュリをかばうように立つ。
「大丈夫だよ」
「お、おい……」
絡んできた相手を見て、シュリは緊張を高めた。
（こいつら、《サーベルバイパー》じゃないか。最近、荒れてるって噂だったけど……こんな昼間から、東通りで絡んでくるなんて）

顔見知りはいないが、昔は宿無しの生活をしていたため、それなりに詳しい。
彼らは旧市街を根城にしている不良グループだった。最近、リーダーに何かあったらしく、統制が取れていない。
ケンカが増えているとは聞いていたが……
街の人々は恐がって見ているだけだ。
当然だろう。
サーベルバイパーといえば、地元で知らぬ者がいないほどの荒くれだ。
威圧的な格好の若者が詰め寄ってくる。全部で四人ほど。
「オイオイ、肩が折れたぞ、どうしてくれんだ⁉」
「テメェ、慰謝料、置いてくか⁉」
「いいコートじゃねえか。そいつを置いてってもいいぜ？」
「へへへ」
シュリは考える――どうやら金持ちだと思って絡まれたらしい。こんな目立つ格好してたら、こういうこともあるか。
走って逃げるか？　警察官より速い自分とオリビエならば……いいや、ダメだ。このドレスとハイヒールでは、それほど速く走れない。
大声をあげるか？　周りの人たちが助けてくれるかもしれない。けれど、助けてもらえなかっ

たら？　相手を怒らせるだけになってしまう。
どうする？
どうすれば？
シュリは、オリビエの横顔を見上げる。
彼は笑っていた。
もしかして、この状況すら楽しんでいるのか⁉
「なぁ……アンタって、もしかして、すごく強かったりするのか？」
「ボクが？　それは………いや……ぜんぜん。ケンカなんてしたこともないのがボクの自慢さ」
「そ、それじゃ、どうして笑ってんだよ⁉」
「得難い経験だからね。これぞ人生の醍醐味じゃないか。この感動を――」
「歌ってる場合じゃないって！」
不良連中が、手を伸ばしてくる。
「なに、ごちゃごちゃ言ってやがんだ⁉　さっさと、出すもん出せって‼」
「フッ……お断りさせてもらおう」
「なんだと、テメェ⁉　痛い目に遭いたいのか⁉」
「争いはなにも生み出さない。愚かな憎しみの連鎖を紡ぐだけさ。そんな君たちに歌を贈ろう。混沌とした心を解きほぐし、やがて人々を結びつけるような、そんな優しくも切ない歌を……」
「オリビエ、危ない！」
シュリは彼の腕を引っぱる。
ぎりぎりで、不良の振るった拳が、彼の鼻先を通過した。
空気を切る音がする。
「うわっ、かすったよ⁉」
「次は顔面を殴られちゃうぞ⁉　オリビエ、もう逃げるしかない！　走れ‼」
「よし、君だけ行ってくれ。ここは、ボクが引き受けよう」
「なに言ってんだ⁉　ケンカしたこともないくせに」
「フッ……仕方ないさ。ボクが本気を出すと、戦争になってしまうからね」
こんなときまで、なにを言ってるのか意味がわからない。
（だ、誰か……誰か助けて‼）
シュリは目頭が熱くなった。
声がする。
「そこまでだ！」
駆けてくる足音。周りの人たちが、さっと道を開けた。

ブラウンの髪の青年が、武器を手にして走ってくる。
「――なにをしているんだ、お前たち‼」
サーベルバイパーの連中が、あわてて後ずさった。
「ぐっ……オマエらは……⁉」
「特務支援課か！」
「オイ、ワジの野郎もいるぞ⁉」
「くそっ！　やっちまえ！」
勢いのついた不良たちが、駆けつけたロイドたちに突っこんでいく。
ロイドが身構えて。
「仕方ない……市民に被害が出る前に、制圧する！」
「わかったわ」
エリィが銃を構えた。
ランディが巨大なスタンハルバードを振り回す。
「しょうがねえなぁ。でかい怪我をさせないようにするほうが面倒だってのに」
ワジが肩をすくめた。
「やれやれだね……僕にも責任がないとは言えないけど」
「関係ないと思う！　これはワジくんのせいじゃないでしょ」

ノエルが断言した。
なにがあったかシュリは知らないが、この件に関しては、絡んできた不良たちが悪いのは間違いなかった。
怒声をあげるサーベルバイパーの連中を、ロイドたちが迎え撃つ。
大騒ぎになってしまった。

すっ、とオリビエが後ずさる。
「ここは任せても大丈夫そうだね」
「あ、そういや……アンタ、警察に追われてるんだったな」
「その言い方は、ちょっと誤解を招きそうなんだが。まぁ、その通りだよ……愛の逃避行といったところさ」
「な、なに言ってんだ⁉」
「そして、このあたりが潮時のようだ。とっても名残惜しいけれどね」
「え？　あ……」
もうすぐ4時になる。劇団の練習が始まってしまう。
オリビエが寂しそうな顔をした。
「この偶然の出会いと、一緒に過ごせた幸せな時と、切ない別れ、全てが愛おしくボクの心に

生涯残るだろう」
「そんなこと言って……どうせオレのことなんて明日には忘れてるだろ」
　オリビエが手を差し伸べ、頬に触れてくる。
「――覚えているさ。そして、また出会う」
「うそつけ。オリビエは外国の人じゃないか」
「本当さ。君の未来は間違いなく輝きに満ちている。なぜなら……」
「なぜなら？」
「この天才演奏家オリビエ・レンハイムのリサイタルを聞くことができたのだから‼」
　はぁ～……とシュリは溜息をついた。
　あれ？　とオリビエが首を傾げる。
「どうしたんだい？」
「もう、いいから行けって。そろそろ、あっちも終わるみたいだぞ」
「フッ……そうするよ。また会おう、親友（アディオス・アミーゴ）‼」
　暴れたサーベルバイパーの連中は、すっかり大人しくなったようだ。エリィとノエルがキツ～くお説教している。
　ロイドがやってきた。

「大丈夫ですか、お嬢さん」
「えっ⁉」
　気付いてない？
　いつもの気安い感じではなく、ロイドが妙にかしこまった雰囲気だった。
　どうやら、シュリだとわかっていないようだ。
　服と帽子だけで……そう思うと、なにやら腹立たしい気持ちになってくる。
「本当に鈍感なんだな」
「え？」
「べつに」
「あの、どちらに行かれる予定ですか？　よかったら、送っていきます」
「アルカンシェル劇場へ、４時までに」
「そうですか。ちょっと急いだほうがいいですね」
「なぁ……本当の本当にわからないのか？」
　シュリは詰め寄る。
　ロイドが慌てはじめた。
「な、なにを……？」
　彼の背後にいるワジが苦笑する。ランディも、ようやく気付いたらしく目を丸くした。

「マジかよ!?　おいおい、見違えたぜ」
「やれやれ、一目見てわからないなんて、ちょっと甘いんじゃない？」
　ワジの言葉に、ロイドが目をこする。
「ふたりとも知ってる女性(ひと)なのか？　もしかして、俺とも会ってるとか？」
　これには、ランディもワジも呆れ顔になった。
「ロイド……おまえなぁ……」
「さすがに鈍感すぎるんじゃない？」
「そ、そう言われても……ん？　いや、そんな、まさか、もしかして……」
　ぐっ、とシュリは奥歯を噛んだ。
　ハイヒールの先で、ロイドの脛を蹴飛ばす。
「オレだよ！」
「シュリ!?　痛ッ!?」
「ふん……そんなに、オレがドレスを着てたらおかしいか」
「いや、さっき会ったときと……違うから…………」
　ワジが肩をすくめる。
「男子三日会わざれば刮目して見よと言うけれど、女の子には三時間も必要ないみたいだね」
「そうらしいな。驚いたぜ」

　ランディの言葉に、ロイドが首を縦に振った。
「本当に驚いたよ。なにかあったのか、シュリ？」
「なにか……」
　ついさっきまでのことを思い出すと、なんだか夢を見ていたような気がして。
　どうにも、うまい説明が出てこなかった。
「ふん……教えてやらない。オレは忙しいんだ。またな」
　シュリは駆けだした。
　ハイヒールだって気にしない。またイリアさんと踊れると思っただけで、まるで翼があるみたいだ。
　劇場に戻ったシュリは、そのイリアから、なにがあったのか、そのドレスはどうしたのか、と根負けするまで訊かれ、洗いざらいしゃべらされるのだった。

　後日――

もうすぐ幕が開く。
劇が始まる。
シュリは緊張で震えていた。
イリアさんは、いつも通り楽しそうだ。
「うんうん、今日もいっぱいお客さんが入ってるわね。貴賓席まで埋まってると気分がいいわ」
「はぁ……これから新しい演技を見せると思うと、緊張しますね」
不安げなリーシャ姉の言葉を、イリアさんが笑い飛ばす。
「ふふふ……見せてあげたらいいわ。きっと驚いてひっくり返るから」
「そ、そんな」
「シュリ、あんたも黙ってないで何か言いなさい」
「なっ⁉　べ、べつに黙ってたわけじゃなくて、しゃべることがなかっただけだよ」
イリアさんが手招きする。
舞台の横にある小さな窓だった。
「ほら、ここから客席が見えるから。ほらほら」
「いいって」
アルカンシェル劇場『金の太陽、銀の月』のリニューアル版の初公演だ。
お客さんで埋め尽くされて貴賓席まで満員の客席なんて見たら、今以上に緊張してしまうに

違いない。
「いいから。見れば落ち着くって」
「そんなのイリアさんだけだよ」
「騙されたと思って」
「ほ、本当かよ」
シュリは疑い半分に思いつつも、小窓から客席を覗いてみる。
まだ照明は落とされてなくて、開幕を待つ人々の顔がよく見えた。
目眩がする。
倒れてしまいそうだ。
けれども、なんだか沸き立つ気持ちもあった。
リーシャが心配そうに声をかけてくる。
「大丈夫？　シュリちゃん、ちょっと恐い顔になっちゃってるけど……」
「え？　いや、なんか、絶対にやってやろう！　って気持ちになったかな」
「そ、そうなの？」
ふっふっふっ……とイリアが不敵に笑う。
「そうよ！　今日はゼムリア大陸中から大勢のお客さんが来てるわ。各国から取材もね。あたしたちのステージを世界に見せつけてやりましょう」

イリアの言葉に、シュリは気持ちを昂ぶらせた。
世界か。
自分のことが、外国人であるオリビエの目に入ることもあるのだろうか。
彼には何度も驚かされて、驚かされっぱなしだった。
一度くらい、シュリが驚かせてやらないと。
「……この緊張も……人生の醍醐味か」
ブザーが鳴った。
客席の照明が落ちる。
ざわめきが聞こえてきた。
イリアが歩きはじめる。
「――さあ、いくわよ！」
「がんばりましょう」
リーシャが声をかけてくれた。
うなずいて、ふたりの後にシュリも続く。
「はい！」
シュリ・アトレイドの幕があがった。



第5話

『いつか貴女とお茶会を』



朝食のパンを焼く、香ばしい匂いがただよってくる。
ロイドは階段を降りていった。
ブラウンの髪を手ぐしで整えて、青と白のジャケットの襟を直す。
香りにつられるようにして、キッチンを覗きこんだ。
「やあ、おはよう」
「あら、ロイド。おはよう」
やわらかな笑みで応じたのは、エリィ・マクダエル。パールグレイの髪を腰まで伸ばしている美しい女性だった。
凝った料理は得意ではない彼女だが、もともと手際がいいので、朝食の支度などはいつも時間に正確だ。
「おはよー、ロイド！」
跳ねてて元気いっぱいなライムグリーンの髪をなびかせて、幼い女の子が突っこんでくる。
お皿を持ったまま。
「おっと！　おはよう、キーア」
体当たりのような勢いで抱きついてきたキーアを受け止めつつ、お皿のほうも落とさないように手を添えるロイドだった。
キーアは温かくてやわらかくて、手足が細い。瞳は丸っこくてキラキラして綺麗だった。

しばらく前にロイドたちが、とある屋敷から助け出した子だ。
賢くて人懐っこい性格なのですぐに打ち解けたが、身元不明で、しかも記憶をなくしている。
そのときの事件にマフィアが絡んでいることもあって、ロイドたち特務支援課が保護という名目で預かっているのだった。
しかし、今や、すっかり仲間の一員になっている。
「キーア、朝食の手伝いをしてくれてたのか？」
「うん！」
「ふふ、キーアちゃんは、覚えが早いから助かってるわ」
「あ、サラダの盛りつけしてたんだった」
キーアがキッチン台へと戻る。
つま先立ちしないと届かないくらいの幼い子供だというのに、彼女の前にならんでいるのは、料理コンテストにでも出せそうなほど凝った盛りつけのサラダだった。いつもの皿に、いつものレタスやタマネギやトマトが載っているだけなのに、まるで別物に見える。
ロイドは目を丸くした。
「うわ!?　すごいな、これは！」
「えへへ……やった！」
「本当に上手よね。食べてしまうのがもったいないくらい」

エリィも手をとめて、感心したように見入っている。
キーアがオーブンを指さした。
「エリィ、パンができたみたい！」
「あ、本当ね」
彼女が蓋をあけると、先ほどから香っていた焼きたてパンの美味しそうな匂いが、ふんわりふんわりとキッチンを包みこむ。
「よし、ティオとランディも呼んでくるよ」
「よろしくお願いね。あつつッ⁉」
焼きたてパンに伸ばした手を、エリィがあわてて引っこめた。
キーアが「これ使って、エリィ」とトングを渡す。
どっちが手伝いだかわからない――なんて言ったら、さすがに怒られるだろうか。ロイドは苦笑しつつ階段へと戻るのだった。

「じーん……素晴らしいです、キーア。この盛りつけは、永久保存すべきかと」
お世辞などではなく、心の底から本気で言っている。いつもは無表情なのに、涙さえこぼしそうな顔をして感動しているのは、ティオ・プラトーだ。
ライトブルーの髪のうえに、猫耳のような形の髪飾り（センサー）を乗せた、背の低い少女だった。
ティオはＭＷＬ（ミシュラム・ワンダーランド）のマスコットキャラクターみっしぃの大ファンで、控えめに言って熱狂的なマニアだ。それと同じくらいキーアのこととなると、いつものクールさが嘘のように饒舌で感動屋になる。
それだけ可愛がっているということだろう。
年齢ほどには、ティオとキーアは身長差がない。体型も大差なく見えた。
「ん？　なんですか、ロイドさん」
「あ……いや、永久保存とまで言われると、ちょっと食べにくいなあ、と」
「この素晴らしい盛りつけのサラダを食べてしまうなんて、とんでもないです！」
ティオが断言して、テーブルを囲んでいたロイドたちの頭に、汗マークが浮かんだ。
エリィなんて、もうプチトマトを食べてしまっているし。
あはは、とキーアが笑う。
「食べてくれないと、もったいないよ～」
「……それは、たしかに……残すなら、写真にすべきでしょうか」
「うちにはカメラなんて高級品はないけどな」
「……だとすると、持っている人に頼むべきですね」

カメラを持っている人、といって最初に思いつくのは、神出鬼没な女性記者の顔だった。
さすがにサラダの盛りつけのために呼びつけるわけにはいかない。そんなことしたら、後が恐そうだ。
「ウォン！」
玄関のほうで、ツァイトが鳴いた。
警察犬という扱いにしているが、それは大型の白狼だった。ティオやキーアなら背に乗れてしまいそうなほど大きい。
「あら、まだごはんを出してなかったわね」
エリィが言うと、キーアがイスから、ぽんと下りた。
「キーアがあげてくる！」
「そう？　じゃあ、固焼きパンがあるから、それを食べやすい大きさに割ってあげてね」
「はーい！」
とととと、とキーアがキッチンに駆けていく。
その様子を微笑ましく見守る三人だった。
そういえば——とエリィがロイドに訊ねてくる。
「ランディはどうしたのかしら？」
「一応、返事はしたんだけど、ずいぶん寝ぼけてるみたいだったな。もう一度、声をかけてこようか？」
「昨夜も遅かったみたいね。就業時間まではまだあるから、寝かせておいてあげたらいいんじゃないかしら？」
「そうするか。ランディなら一瞬で食べちゃうだろうしな」
「……この盛りつけを堪能しないなんて、ランディさんはダメダメです」
「ははは……」
「…………………」
ティオが、ちらりと台所のほうを気にする。
キーアはツァイトの朝食を用意しているようだ。それを確認してから、彼女は声をひそめて。
「……すこし、気になる情報があるんですが」
「情報？」
ティオがキーアの耳に入れないようにしていることは、その様子から明らかだったので、ロイドも声は控えめだ。
「……先ほど、導力端末をチェックしたところ、共和国で指名手配されている犯罪組織が、クロスベルに来ている可能性がある、とのことで」
「外国の犯罪組織か」
クロスベル自治州の特殊性ゆえに、どうしても犯罪者たちに狙われやすいという問題がある。

そうした負の部分を少しでも解消するために、セルゲイ課長の発案で特務支援課は作られ、ロイドたちは賛同して、市民の支援要請に応えているのだが……
「俺たちの仕事は、いつも後手に回るからな」
「そうね……」
エリィが厳しい表情でうなずいた。
ティオも小さく首肯する。
「……その犯罪組織なのですが、どうやら共和国では、主に誘拐事件を起こしていたようです」
「ッ⁉」
ロイドは息を呑んだ。
ティオがキーアに聞かせたくない、と配慮するわけだ。キーアを保護したときの状況からすると、彼女は誘拐事件の被害者である可能性が高い。
「まさか、その犯罪組織……キーアと関係があるのか？」
「どうでしょうか？　時期的には無関係とは断言できませんが……」
「決めつけるのは危険だな」
「はい……いずれにしても、誘拐となれば各国の警察組織はもちろん、遊撃士協会も協力して最優先で解決に当たる重犯罪です……絶対に許せません……」
いつにも増して、彼女の表情は固かった。

エリィが気遣うように尋ねる。
「ティオちゃん？　顔色が悪いけれど、大丈夫なの？」
「…………はい。問題ありません」
「それなら、いいのだけれど……なにかあるなら、遠慮せずに言ってくれると嬉しいわ」
「……ありがとうございます、エリィさん」
あまり感情を表に出さないので、ロイドは気付くのが遅れたが――言われてみると、ティオの顔色は普段よりも白くなっていた。
きゅっ、と唇を引き結んでいる。
なにかに耐えているような、そんな様子だった。
気にはなるが……
ティオが語らない以上、ロイドは無理に聞きだそうとはしなかった。
彼女が深呼吸して言葉を続ける。
「……それだけ、放っておけない犯罪だということです……一刻も早く逮捕しなければなりません」
「ああ、もちろん、そんな連中から市民を守るのが、俺たちの役目だからな」
「……共和国に情報提供を要請しています。この件に関しては、さすがに拒否しないでしょう。続報が得られたら、すぐお伝えします」

「頼む」
　ロイドは深くうなずいた。
　エリィがため息をつく。
「たぶん、ルバーチェ商会が、先日の《黒の競売会（シュバルツオークション）》でトラブルを起こして、勢力を弱めたことが、少なからず影響してるんでしょうね」
「彼らが抑止力になっていた？」
「それは否定できないと思うわ。善し悪しは別としてね」
　ルバーチェ商会は、クロスベル市を仕切っている一番勢力の大きなマフィアだった。この街に来る犯罪者たちに有形無形の圧力をかけてきた存在でもある。
　しかし、先日、特務支援課がキーアを保護した事件により、今は活動を制限されていた。
　ロイドは首を左右に振る。
「たしかに、そういった面があって、ルバーチェ商会の立場を苦しくした一件が、結果的には外国からの犯罪者の流入という形で現れたのかもしれない。けれど、この街を本当によくするためには、マフィアの圧力に頼るのではなく、俺たち警察が治安をよくしないといけないんだと思う……そのために、一人一人が、できることをやっていこう」
「ええ、そのとおりね」
「……がんばりましょう」

　ちょうどキーアが台所から出てきたので、この話題は終わりとなった。
　いずれにしても、まだ情報不足だ。しばらくは共和国の捜査協力を待つしかないだろう。
　ツァイトに朝食をあげるキーアを、ロイドとエリィとティオは見つめるのだった。

　朝食のテーブルにキーアが戻ってきて、首をかしげる。
「なに話してたの？」
「……気にすることはありません、キーア。仕事の話です」
「そっか」
「……はい」
　あ、それでね！　とキーアが朗らかに笑って話題を変える。
　この明るさに助けられてるな、と思うロイドだった。
　キーアがめいっぱい大きく両手を広げる。
「こ〜んな箱が、貯蔵庫にあったんだけど、なにかな？　きれいな紙で包んであったよ」
　貯蔵庫というのは床下にある収納のことだ。
　導力を使った冷蔵庫なんて一部の料理店くらいにしかない。一般家庭は、たいてい床下に野

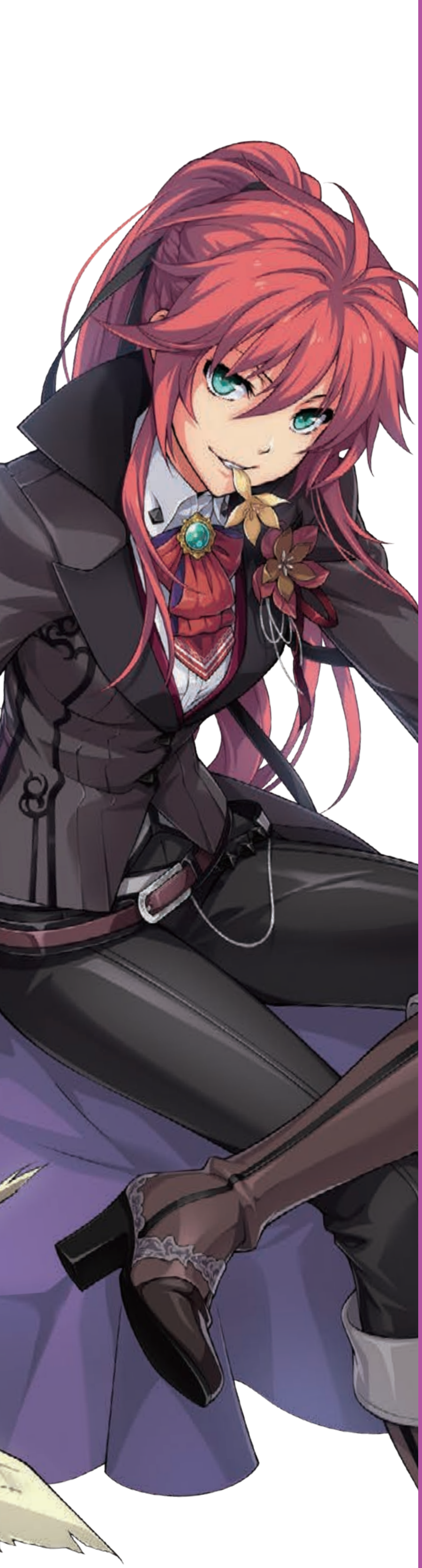
菜などをしまっておく。表に比べると、だいぶ涼しいし、乾燥もしにくいのだった。
エリィが首をかしげる。
「そういえば、何かあったわね？　誰か入れた？」
「俺のではないけど？」
「……わたしのでもないです」
ロイドは少し考えこむ。
「貯蔵庫は昨日の夕飯でも使っている。そのときは、大きな箱なんてなかったはずだ。とすると、昨夜のうちに入れられたってことになるよな」
「……貯蔵庫を使う可能性があって、ここにいないのは、セルゲイ課長とランディさんだけです」
「夜に何か入れる可能性があるとすれば……あっ、噂をすればなんとやらだ」
ゆっくりと階段を降りてくる気配があった。
「うーっす」
ガタイのいい、赤い髪色の青年ランディが姿を現す。
いつも警備隊時代から使っているというコートを引っ掛けて、今はシャツの胸元が開いたままだった。鍛え抜かれた胸板が、わずかに見えている。
自分の席につくと、置いてあったパンをつかみ、かぶりついた。
警備隊出身の彼にとって、食事は栄養補給が目的であって、盛りつけを楽しむ類のものではないのだろう。
高級料理やお酒類にも詳しいランディだが、普段の食事に対するこだわりは、まったくないのだった。
「はぐはぐ、もぐもぐ」
「なあ、ランディ。貯蔵庫に箱を入れた覚えはないか？」
「ん？　ああ、昨日はカジノで大勝ちしてな。よく覚えてねえんだが……」
ティオがジト目になっていた。
「……ランディさん……よく覚えてないものを貯蔵庫に入れないでください」
「ちょっと見てくるわね」
ため息まじりにエリィが席を立つ。
しばらくして、彼女が困惑した様子で戻ってきた。
「あ、あの……ランディ？　あれって本当に貴方が買ってきたの？　すっごく高かったんじゃ……？」
「赤色に金の文字が書いてある包み紙だろ？　それなら俺が買ってきたもんだぜ。なんだ？妙なものが入ってたのか？」
「妙なものではないけれど……大きなホールケーキがまるごと入ってたわ。すごく美味しそうなんだけど」

ふと、ランディが額を押さえる。
「うっ……そういや……たらふく呑んだあと、甘いものが食べたくなってケーキを頼んだんだよな。なかなか美味かったから、土産にしようと包んでもらったような気が……」
「わあい！　ケーキケーキ！」
キーアが嬉しそうに両手を挙げた。
席に戻ってきたエリィが、自分を納得させるようにつぶやく。
「そうね……買ってきちゃったものは仕方ないわ」
「どうしたんだ？　エリィってケーキが苦手だったっけ？」
ロイドの問いかけに、彼女は首を左右に振った。
「そうじゃなくて、あのケーキはセレブ御用達の超高級店のものなのよ。それをワンホールだなんて、いったいいくらしたのかと思って……」
「へー美味しいのかな？」
「ええ、それは間違いないわ」
クロスベル市長の孫であるエリィは、そうしたセレブのパーティーに何度も出席している。
彼女が言うのなら、本当に美味しいのだろう。
そして、よっぽど高いに違いなかった。
慌てた様子でランディがサイフを確かめる。

さー……と顔色を青ざめさせていたが、子供の前でもあるので、それについて尋ねるのは止めておいた。
ティオが首をかしげる。
「……ワンホールというと、何人ぶんくらいあるのでしょうか？」
「二十人ぶんぐらいは、あるんじゃないかしら？」
「……多すぎです」
ティオならずとも、そこは呆れてしまうところだった。
キーアは無邪気に喜んでいたが、そんなには食べられない。
どうしたものか、とロイドは考えこむ。
「夕方ぐらいには食べないと悪くなってしまうよな？　でもそんなにたくさんは食べられないぞ」
「……ツァイトも、そんなには食べられないかと」
「そもそも、ツァイトにあげて大丈夫なのか？」
たしか、犬はチョコレートがダメだったはずだ。いや、ツァイトは普通の犬ではないし、そもそも犬ですらないのだけれど。
エリィが提案する。
「今日は遠出をするような支援要請も入っていないし、お茶をする時間くらいはあると思うわ。

せっかくだから、誰か呼びましょうか？」
「なるほど……午後のお茶会か。いつもお世話になってる人たちを招待するのもいいかもしれないな」
「ふふ、ちょうど先日、おじいさまから、いい茶葉をもったところなの。紅茶にも期待してちょうだい」
「マクダエル市長から？　それは楽しみだな」
「よく分かんないけど、『おちゃかい』って楽しそー‼」
　嬉しそうにキーアが声をはずませた。
　ティオが席を立つ。
「……そうと決まれば、支援要請をこなしながら声をかけていきましょう」
「じゃ、キーアがここの片付けやっておくね！」
「ありがとうな」
　ロイドが頭をなでてあげると、彼女はくすぐったそうに目を細めた。
　話がまとまったようなので、さっそく出掛けることにする。
「それじゃあ、みんな、行こうか！」
「ええ、行きましょう！」
「……はい！」

　一人だけ、ランディが「やばい……給料日までどうすんだ、これ……？」とサイフを握りしめたまま青ざめていた。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.147

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで ▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、(falmaga@field-y.co.jp) まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.147プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①TVアニメ『閃の軌跡』は観ましたか？　また
　その感想を教えてください。
　アンケート②アニメで観てみたい作品はありますか？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：イースX -NORDICS（ノーディクス）- 最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：英雄伝説 碧の軌跡 いつか貴方とお茶会を

応募締め切り　5月26日（金）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。